

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会 優秀賞

「未来へつなぐ税の工夫」

足立区立 第四中学校

二年 矢口 果歩

「国債って何？」母に聞いた。夏、選挙関連のニュースを見てみるとよく耳にする言葉だけれど、意味は知らなかった。母からは「国が発行する債権」と一言で返って来た。

調べると、債権とは資金を借り入れた時に発行される借用証明書の一種。国債とは国が発行する債権のことであり、日本はすでに多くの債権を発行している。つまり、日本は多くの借金を抱えているということ。さらに、今使われているお金の一部は未来の世代が返さなければならぬと知り、驚いた。

税金は無限にあるものではない。私の身の周りに目を向けると、道路、公園、学校、教科書、図書館など多くの公共のものが税金によって成り立っている。税金は、みんなの「当たり前」を支えてくれる。しかし、それは「限りある資源」でもある。限りある資源は「使う」だけではなく、「どう使うか」を考えることが必要だ。税の使い道に目を向け、何を優先的に使うべきかを考えることは、私たち一人ひとりに求められる姿勢だと感じた。福祉や医療、防災、教育など、税で支えるべき分野はたくさんある。それらを限られた財源でまかなうには、無駄なく効果的に使う工夫が必要。そして、その使い道について、人任せにせず、関心をもち、考えることは社会生活を送る上での責任だと思う。

SDGsの学習で、「持続可能な社会」という言葉を知った時、

「自分たちの行動が未来につながる」という考え方が心に残った。それは、ただ今の便利さを守ることでなく、未来の人たちの暮らしにも責任をもとうとする考え方だ。税の仕組みも、このSDGsの精神につながっていると私は思う。限りある財源でよりよい社会を築こうとする。 ” 未来への工夫 ”。未来へつなぐ ” 工夫 ” を考えることは、今を生きる私たちの責任だと思う。

税金は誰かが勝手に使うものではなく、私たちが未来のために選び、支えるものなのだと気づいた。

限りある税金を、未来のためにどう使うか。それは国や政治の課題だけでなく、私たち一人ひとりが考えていくべき責任だ。税の仕組みも「自分ごと」として受け止めることで、社会は少しずつ変わっていくかもしれない。小さな気づきから未来への責任への税のことを調べ、学んだこの経験は、私にとってその第一歩になった。自分が将来働いて、税を納めるようになったら、それが次の世代の役に立つとしたら、誇りをもって税を払いたい。そして、税を通して未来を支える一員になれることに少しの希望と誇りを感じている。